

Trieschmann RB 著

Aging with a Disability

宮森孝史 (七沢リハビリテーション病院)
脳血管センター心理科

本書の題名にある aging は、文字通り年をとること、著者のことばを借りるなら、生きることと同義的に用いられており、必ずしも老化のみを意味するものではない。すなわち本書のテーマは、障害をもって年をとること、障害とともに長く生きてきた人たちに生じてくるさまざまな問題をとりあげ、それらを一つの理論的概念的枠組みでとらえ論じようとしたものである。従って、老年期に障害を受けた人の問題を論じたものではなく、従来になかった新しいテーマを扱ったものといえる。

全体は6章より成る。導入として第1章では、本書のテーマを検討していく上での概念的枠組みが提供される。すなわち人間の行動あるいは適応を、心理社会的因子

(P)、生物的一器質的因子(O)、環境因子(E)それぞれの相互作用による一体系としてとらえ $B = f(P, O, E)$ 、aging も障害もその体系の一つのパラメーターにすぎないことが述べられる。以下各章はこの概念的枠組みを基礎にし、健康の概念、障害をもって年をとっていく身体に起こる問題、aging と心理社会的因子、環境因子との関係などのトピックスが扱われていくが、第2章で紹介される8人の事例は、理論的で抽象的表現の多い本書の内容を具体的に豊かなものにしてきている。彼らは、戦傷、ポリオ、交通事故後遺症などにより障害を受け、30年以上を経た人たちである。

著者が指摘するように従来の専門研究は、ほとんど急性期疾患に

その関心が向けられており、長期の障害というのもせいぜい受障後18カ月から5年をさすものであり、本書に登場するような数10年以上も障害をもって生きた人たちは事実上忘れられた人たちとなっている。しかし、彼らが長い時間をかけて戦ってきた生活史を知ること、われわれがやがては迎える老年期にわれわれ自身に起こってくる問題を解決する際の重要な示唆を与えてくれることになる、というのが著者の主張のようである。

本書の鍵概念である $B = f(P, O, E)$ については同著者の論文 *Coping with a disability: A sliding Scale of Goals*. Arch Phys Med Rehabil Vol 55, Dec 1974 でも論じられている。障害をもって老いていく人が、とり残された、忘れられた存在とならないためにも、リハビリテーションにかかわるすべての人に、一読をお薦めしたい一書である。
(148 pp, 1987, ¥6,140, Demos Publications, New York)

—— 医学書院洋書部取り扱い ——

ニュース

川崎市で全国初の「心身障害者福祉基金」

伊藤三郎川崎市長は1月7日、年頭記者会見で、全国初の「心身障害者福祉基金」を4月に創設することを表明した。国の福祉政策が後退するなかで障害者への福祉政策を恒常的に前進させることが狙い。当初予算で約1億円を計上する一方、市民や企業に対しても募金を呼びかけ数年間で5億円を積み立て、その利息で運営する。

市長は「心身障害者福祉事業基金」の創設について「地方公共団体としては財政がどんなに苦しくなっても充実した福祉ははずせない。国に福祉目的税の構想があるが実現しても（配分が）偏る恐れがある」と暗に国家予算の福祉後退を批判した。

(「毎日新聞」1988. 1. 8. 川崎)